

Symbolization of Chinese color words

Liu Keping

The sense of color belonging to a specific people is easily affected by culture and living environment. Therefore there is a certain commonality implied specific sense of color for the same race and both an image and a symbol to be born thereby. Of course, such a sense and its cultural implication change with the development of that culture. However it is difficult for such a sense and corresponding feelings to readily get away from these five natural elements theory. This is because the five natural elements, as well as color, are traditionally of fundamental importance in China in particular. Therefore, the symbolic characteristics that color words have in the depths of Chinese consciousness are deeply rooted. One can strongly feel their symbolic character. This paper will consider the Chinese historic background and symbolic implication of color vocabulary in terms of Chinese language and culture.

中国語色彩語の象徴化

劉 渴 氷

0. はじめに

色は我々が好むと好まざるとに関わらず、無意識のうちに我々の日常生活に種種の面で深い関わりを持っている。世界のいたるところの文化を歴史的観点から見ても、色に全く無関心な民族はありえない。喪服と言えば黒に決まっていると思う日本人が多いが、中国では白であり、弔事を白事というくらいである。白の喪服は中国人からみれば当たり前のことであって、日本人からみたら奇妙に思えるかもしれない。文化には元来このような側面があるだろう。色彩語は我々の身の回りに存在し、言語として出てくるその数の多さは、色を利用することがいかに便利であり、いかに有益であることを示している。

ここでは中国語の色彩語の研究を通してその文化的特徴を見出して、中国文化の中で育ってきた色の呼び方や色彩語の意味の拡張とその文化的背景との関係を明らかにしたい。

1. 先行研究と問題点

色彩語について最も早く研究した者の一人としてイギリスの学者、政

治家 W. Gladstone (Studies on Homer and the Homeric Age, 1858) を上げることができる。かれはホメロス時代のギリシャ語に色彩語の語彙数が少ないことを発見し、それらの色彩語は抽象的で、意味が曖昧であり、それは古代ギリシャ人の色彩弁別能力が現代人ほど発達していなかったためだと指摘した。この発見はドイツの言語学者 Geiger の興味を引き出した。1867 年かれはドイツ動物、植物学者学会で古代人と現代人の感知器官の相違に着目し、古代人が持つ抽象的色彩語と色彩語の意味に対する不確定性は色彩弁別能力の不足によるものだと指摘し、色彩語の一般的発生順序の仮説—人の色彩に対する感覚順序は色彩スペクトルにおける配列順序と関係があることを主張した。

彼は後にこの仮説を『人類発展史探求』(Contributions to the History of the Development of the Human Race, 3) において発表した。同年ドイツ眼科専門家 (H. Magnus) は「原始民族視覚調査」(Untersuchungen über den Farbensinn der Naturvölker, 1880) を発表し、その中で Geiger の理論に反駁した。

1969 年アメリカの言語学者 Brent Berlin と Paul Kay は基本色彩語 (basic color terms) 理論を提唱した。人類言語には十一個の普遍的な基準範疇があると主張し、異なる言語の色彩基準範疇が違うが、皆ある段階に従い発生して行く。Berlin と Kay は各民族の色に対して感知する生理能力には差異がないが、文化の類型化の違いにより各言語のスペクトルに対する区別も違うと指摘した。言語は特別な方法で人々の色に対する経験を記録している。反対にこれらの色彩語は人々の色に対する説明性を制限している。

Berlin と Kay は『基本色彩語の普遍性と発展史』(Berlin and Kay, 1969, Appendix II 「The growth of color vocabulary」) の中で新しく色彩語の語意の普遍性に対して論じた。その中では基本色彩語について定義

をした。

中国語の中の色彩語は漢民族の社会的発展につれて豊かになってきた。1964年張培は『基本英語声色詞与翻譯』（商务印书馆，1964）のなかで比較的詳しく英語の色彩語の構成、役割などについて論じ、また中国語の色彩語とも比較した。

八十年代から色彩語研究成果が次第に増えてきた。刘云泉の「色彩词在移就格中的修辞功能」（『修辞学习』1984）は代表的な論文である。語彙的角度から色彩語を研究したのは刘均杰の「颜色词的构成」（『语文教学与研究』1985）と伍铁平の「论颜色词及其模糊性质」（『语文教学与研究』1986）である。伍铁平は色彩語の曖昧な表現とその発生原因について論じた。張旺熹は「色彩词语联想意义初论」（『语文教学与研究』1988）で「色彩词语联想意义的取得，是基于人对色彩的联觉和色彩对人的主体影响两方面原因的。（色彩語の意味的連想イメージの形成は、人の色彩に対す連想、感覚と色彩が人に与える影響という二つの原因に基づくものである。）」と述べた。このような認識に立って、一歩進んで色彩語の連想イメージの拡散性と二重語意特徴について研究した。色彩語の連想イメージと二重語性、象徴する意味は一つの問題であるが、それぞれ異なる側面を持っている。この三つの側面が互いに結びついて人の主体と言語、言語形式と文化価値の間に様々な関係を表わしていることを指した。張（1988）の研究では色彩自身が持つ客観的な属性を論じた。

九十年代叶军は『現在漢語色彩词研究』（内蒙古出版社，2001）のなかで色彩語の定義、類別、特徴などの面から初め基本色彩語だけではなく抽象的色彩語をも研究した。色彩語の研究範囲を拡大した。その上初めて明確に色彩語と含彩語を分けた。叶军は語彙学理論と一般言語学理論に基づくと同時に心理学、光彩学、光学、比較言語学などの面からも色彩語を研究した。

1996年古田朱美、立松昇一は「中国語の色彩語彙と象徴」(『流通経済大学論集』30(3)1996)の中で色彩、動物、植物などの項目について日中双方の立場から論じた。

1999年郑高永は「中・英・日颜色词信息传递对比」(『奥羽大学文学部紀要』(11)1999, 12)でまったく語系の違う中国語、英語、日本語の三ヶ国語の色彩による伝達効果の相異点が色彩と民族文化、色彩語の分類、相違性と使用の面から論じた。

2002年矢野光治は「現代漢語における色彩語彙の表象」(『立正大学文学部研究紀要』(18)2002)に古代漢語ではどのような色名があるか、どのような成立過程や意味を有するかについて日中を代表する辞書類からその用例や用法を精察した。同時に、現代漢語についても同じ調査をした。

安井稔は『言外の意味』(1978)で「共感覚とメタファー」の節で五感(視・聴・臭・味・触)がからんでいるメタファーには、外のメタファーと異なる特殊な点があると指摘した。原感覚が聴覚で、共感覚が視覚であるような最も身近な具体例は「黄色い声」である。声は、本来、聴覚で識別するものであり、それを黄色いという視覚的表現で示している。原感覚とその共感覚との間には、かなり明確な法則性が存在する。共感覚は、原感覚に比べ、通例、より高次の、あるいは、より抽象度の高いと考えられる感覚である。感覚の分化度と抽象度とは、「皮膚感覚」(触覚、味覚、臭覚)、視覚、聴覚の順に高く、皮膚感覚の内部にも、触覚・味覚・臭覚の順に高くなる階層性があると論じた。ところが、視覚と触覚を比べると、予想とは異なり、固有の感覚表現は、抽象度のより高い視覚において、より少ないというふうにはなってきた。識別可能な感覚対象の数は増大するに対し、固有の感覚表現の数は、それに伴った増え方を示さないからである。その増え方における落差の分だけ、より高級である感覚表現の側における、いわば、輸入超過現象が生ずるのは当然

であり、その入超分の処理に（低級感覚表現のほうから）駆り出されるのが、共感覚的メタファーなのであると安井稔(1978)が主張した。

以上のように、スペクトル以外の色彩語に関する研究はまだ少ない。言語は民族性の外在表現である。民族の伝統的な思惟方式は直接色彩語の発生と関係がある。郑高永は「中・英・日颜色词信息传递对比」(『奥羽大学文学部紀要』(11) 1999, 12) で三ヶ国語の色彩語について比較したが色彩イメージの研究は充分ではないと感じる。彼は「日语中的「黄色い声」就是用来表示女性小孩的贬义词」と述べたが、実際「黄色い声」には明るい、可愛らしいというイメージがあり、けなす意味がない。古田朱美、立松昇一の「中国語の色彩語彙と象徴」(『流通経済大学論集』30(3) 1996) も主に黒、赤、黄、白この四つの色について象徴化を述べたがこの四つ以外の色には触れなかった。

本論では、中国の伝統的な観念に基づいて伝統的な五色を中心に、時代の流れによる人々の色彩の連想イメージの変遷を探りたいと思う。

2. 伝統的な色彩認識—正色と間色

中国の伝統的観念による「五色」は青、赤、黄、白、黒を指していた。古代から色を正色と間色に分けていた。青、赤、黄、白、黒五色は正色で、緑、紅、碧、紫、流黄五色は間色である。『説文』では：「緑、青黄也；紅、赤白也；碧、白青也；紫、黒赤也；流黄、黄黒也。」と記述している。間色は正色が混ざって得た色で、純粹ではない中間の色である。

『孔子家語・五帝 第二十四』に「尊ばれるものが、それぞれ王となった所以の徳の次の徳に従うのである。夏後氏は金徳を以て王となったので、(金の次の水徳の色) 黒を尊ぶ。弔事では遺体を棺に納めるのは日暮れに行い、軍事では黒馬に乗り、犠牲は黒毛を用いる。殷人は水徳を

以て王となったので、白を尊ぶ。弔事では納棺は日中に行い、軍事では白馬に乗り、犠牲は白毛を用いる。周人は木徳を以て王となったので、赤を尊ぶ。弔事では納棺は日の出に行い、軍事では赤馬に乗り、犠牲には赤毛を用いる。」と孔子が述べている。長い間の封建的な社会の中で、色を尊ぶ考え方が確立し、五徳（温、良、恭、儉、讓）に五色を配したり、異なった色の服装で異なった地位、階級を区別してきた。

陰陽五行説では、一切の自然現象と人間の活動を五種類の物質元素「水、火、木、金、土」に還元し、万物のすべての変化は陰陽二つの対立、互いの力の相互作用によって引き起こされるとしている。『礼記・礼運』に「五色六章十二衣、還相為質」（五色、六章、十二衣、還りて質を相為す）とある。『説文』に「青は東方なり。赤は南方なり。白は西方なり。黄は土の色なり。」とある。黒には釈文がない。段玉裁の補によると、「北方の色なり」とある。

五色	青	赤	黄	白	黒
五行	木	火	土	金	水
五方	東	南	中	西	北
五帝	青帝	赤帝	黄帝	白帝	黒帝
四季	春	夏	土用	秋	冬

漢代（紀元前 206 年）から、「五行」の説が盛んになり、世界は「木、火、土、金、水」で構成されていると考えられていた。「五色」と「五行」は相対応している。また「五色」と「五方」（東、南、中、西、北）が相対応し、「五方」にはそれぞれの神があり、「五帝」（東方の青帝、南の赤帝、中央の黄帝、西方の白帝、北方の黒帝）と言われ、「五色」と「五帝」も相対応すると考えられていた。「五色」はまた「四季」（春、

夏、秋、冬）とも相対応している。五行家の論法によれば、中国では天下太平、国家安寧は季節の順当な循環によってなされるとし、天子は五行の法則に従って、方位と色彩を順守することによって、季節の到来を万民に知らしめるとともに、自らも確認したということである。この場合、時間と季節という抽象概念を把握するために、最も重要な役割を果たしたのは色彩である。春は木（東）、青、夏は火（南）、赤（朱）、秋は金（西）、白、冬は水（北）、黒というように五色をそれぞれ配している。従って、「青春」とか「朱夏」とか「白商」、「玄冬」といった言葉が出来た。「白商」はまた「素秋」、「素商」ともいう。素は白色を意味する。商音を秋の配した。ゆえに、また素商、白商とも称する。

しかしながら、この五色は、伝統的な観念によって、人々の間で習慣化され、規範化され、語彙の中に定着していくわけであるが、五色はいわば五行思想の中から演繹された人為的な色彩体系ともいえる。

『詩経・邶風緑衣』に「緑兮衣兮，緑衣黄里。心之忧矣，曷维其已。緑兮衣兮，緑衣黄裳。心之忧矣，曷维其亡。」（緑の衣、緑の衣に黄の裏よ。心の憂いは、いつか已む。緑の衣、緑の衣に黄の裳。心の憂いは、いつか亡む。）とある。身分ある人がその不遇をかこつ歌のようだ。序では莊姜の詩とする。当時姜が僭上の沙汰あり、夫人が位を失ってこの詩を作るという。緑は間色、黄は正色。『礼記』玉藻に、衣は正色、裳は間色という。それであるのに今、尊い黄色を裏とし、裳とし、卑しいはずの間色の緑を以て上衣にする。それは卑しいもの、僭上を喩えたのである。

中国語には古くから、豊かな色彩語に恵められている。『説文』の糸部には絹織物の色に関する言葉は沢山がある。例えば、紅、緑、紫、絳、緋、縹、素など。この現象は中国語の大部分の色彩語には古代の絹織物との関係は大変密接であることが分かる。色彩語の象徴義も客観事物の色彩連想を通して生まれたのである。

3. 色彩語とその象徴

3.1 青の象徴

「青」は古代人が考えた五正色の「青、赤、黄、白、黒」の首位の色で、『説文』に「青、東方之色也、木生火、从生丹、丹青之信、言象然。」とある。「丹、巴越之赤石也。」『説文解字』は字形を分析して、「青」は「生」と「丹」から出来ておりそれは一種の濃緑色の鉱石だったと推測される。「青」は「五行」の「木」と相対応しているのは、草木の色は青色であるので、中国語の中ではいつも草木を「青」で形容している。「青」と「四季」を関連させると、「春」と対応することになり、春は草木がよみがえり、一面青色となるので、中国語には「青春」と言う言い方がある。その意味は「青色の春」である。杜甫の『聞官軍收河南河北』と題する詩に「白日放歌須纵酒、青春做伴好还乡」とあるのはこの意味で、後に若い時代という意味に転じた。『詩経』は周の始めから春秋の半ばまでの作品で、中の緑色の動物、植物はすべて「青」で表現している。例えば、『卫风・淇奥』に「瞻彼淇奥、绿竹青青。」とある。『小雅・苕之华』に「苕之华，其叶青青。」とある。『小雅・青蝇』に「营营青蝇止于樊」とある。従って、殷の時代のもうすでに「青」を使って、緑色の植物を表現することが推理できる。

「青」と「五方」を関連させると「東」と対応することになり、東方の神は「青帝」と言われ、これは春の神である。唐代の蜂起のリーダー黄巢は『詠菊』の詩の中で自分を「青帝」に譬えて「飒飒西风满院栽、蕊寒香冷蝶难来。他年我若为青帝、报与梨花一处开。（飒飒たる西風満院に栽う、蕊寒く香冷ややかに、蝶来たり難し。他年われもし青帝となれば、梨花に報与して一处に開かしめん）」と詠じている。

「青」は中国古代の慣用色彩語の一つである。時には緑色を表わし、

時には藍色を表わし、時には黒色を表わす。『詩経・衛風・淇奥』に「瞻彼淇奥、緑竹青青」とあり、中の「青」は緑竹の色彩を形容していて、緑色を指している。『荀子・勸学』に「青取之于藍而青于藍（青は藍より出でて藍よりも青し）」とあり、昔は青色を藍色から取ったのである。ここでの「青」は藍染の色を指している。「青天」とは実際は藍色の空であり、「青雲」は藍色の空に浮かぶ雲のことである。「青」は濃くなると黒色に近くなる。それで昔の人は黒いものも「青」と言った。例えば、「青衫」とは黒い衣服である。唐王朝の官服、八品、九品の等級の服は青衫であった。白居易は江州の司馬に左遷され黒い服を着ていた。「座中泣下誰最多、江州司馬青衫湿。（座中なくこと誰が最も多き、江州の司馬青衫潤う）」の青衫は実は黒い服であり、また昔の人は黒い髪の毛は「青絲」と言ったように、李白は『将進酒』の中で「君不見高堂明鏡悲白发、朝如青絲暮成雪。（君見ずや高堂の明鏡、白髪を悲しむを、朝には青居糸の如きも、暮れには雪となるを）」と詠じている。目の瞳は黒色であるが、昔の人は「青眼」、「青眸」と言った。青眼で人を見ることは尊敬を表し、白眼で人を見ることは軽蔑を表した。例えば「青衫」とは黒い衣服である。「青眼」は黒い目である。青眼で人を見ることは尊敬を表し、白眼で人を見ることは軽蔑を表した。身分の低いことを表す「青衣」とは昔身分の低いものの着る服で「青樓」は遊女のいるところ、妓楼を指している。「愣头儿青」とは無鉄砲な人である。中国語を見ると、「青樓」、「青陽」、「青鳥」、「青蛾」、「青宮」、「青雲秋月」などがある。「青白眼」は「青眼」と「白眼」で親しい人に対する目つき、好意をもって待遇すること、人を重視することを「青眼」とか「青目」という。これに対して、人を軽視することを「白眼」と言う。「青天」は青空を指す以外清廉で公正な官吏にも指している。

「青」は黄色と調和してあでやかな緑色となる。昔の人は青色と緑色

を区別しなかった。例えば「不分青紅皂白（黒白、善悪をわきまえない）」の中で青と「紅」が相対しているが、実際は緑色のことである。緑色にはもともとけなす意味はない。『詩経・邶風』に見られる、「緑兮衣兮、緑衣黄里。（緑の衣、緑の衣に黄のもすそよ）」は当時の美人が流行の緑色の服を着て、色があでやかで美しいさまを描写したものである。藍天は「青空」の意味をする。「蔚藍」はこいあい色である。心がゆったりとしてよい気持ちになること。思いをはせる。「藍図」は青写真、「藍色的海洋」と言う表現もある。身分の低い人、肉体労働者を指す。「藍領工人」は肉体労働者を言い、ホワイト・カラーに対している。「脱藍衫換紫袍」は秀才の服を脱いで高官の紫色の衣服に着替えるを意味すし、いわば進士に合格すること。

青と黄の間色である。「緑雨」は新緑の頃に降る雨を意味する。「緑煙」は春、若葉のはえ出た木にかかるもや。

「緑」には不名誉な意味がある。元、明両時代になると芸妓と妓楼で働く男は緑の頭巾をかぶらされたので、男子が緑の頭巾をかぶることは不名誉なことであった。男子が緑色の帽子をかぶっているのは妻に情夫がいることを表すといわれた。

まだ、「緑」には平和安全の象徴でもある。西洋文化では緑色が平和と安全の象徴であり、白い鳩が緑色のオリーブの枝を加えているのは平和の標識である。最近では一部の人が自然環境保護と生態保護の為に「グリーンピース（国際環境保護団体）」を設立した。緑色のこういう素晴らしい文化の象徴義は中国の人々にも受け入れられている。障害なく通じる、便利快適を現す。中国の郵便局の印である。「開緑灯」、「緑衣使者」のような言葉がある。

「青」は基本的な色彩語で、数多くの複合語や成語などを作ったり、典故に用いられており、今でも依然として藍や緑や黒を代表している。

「青」は生命力がとても強く、現代中国語の中では「若い、新しい」の意味として使われている。例えば、「楞头儿青」は世間知らずの愚か者を指している。

3.2 黄の象徴

「赤」は「五行」と関連して「火」と対応し、「五方」と関連して「南」に属し、「五帝」と関連して「赤帝」と対応し、「四季」と関連して「夏」と対応している。漢高祖劉邦は自ら赤帝の子と称して、赤色を崇拝し、楚と漢が争った時に、漢軍は赤いのぼりを用いた。生まれたばかりの赤ん坊は赤い色をしているので「赤子」と呼ばれている。赤ん坊は純粹であるので、純粹な精神のことを「赤子之心」という。「赤」は現代漢語において、「紅色」として使うのが大変少ない。例えば、スペクトルを表わすときに「赤、橙、黄、緑、青、藍、紫」のように表現するが、多くの場合は「赤」と「色」と一緒に使うからこそ、「紅」を表わすことが出来る。「赤」の基本色彩語の地位はもうすでに「紅」に取って代わった。

「朱」と「赤」は似通った色である。だが、「朱」の字は「木」に由来し、松柏に類する色である。古代では貴族の邸宅の正門には朱を塗ったので、貴族の家を「朱門」と呼んだ。杜甫の『自京赴奉先县咏怀五百字』に、「朱门酒肉臭、路有冻死骨。（朱門に朱肉臭きに、路には凍死の骨があり）」の名句がある。

『説文』に「紅は帛の赤白色なり」とある。現代でいう「粉紅色」（ピンク）である。その時の「紅」は「正色」ではなくて、「間色」であった。『論語・郷党』に「紅紫不以为袞服」（紅紫は平服を為らず）とある。

「紅」はもと薄赤色であり、正色ではなくて、「赤」と「白」を混ぜ合わせた色で、もともとピンク色の絹織物で、染色と関連があり、糸へんが用いられた。その後もっぱら色彩を指すようになった。南朝の陳の後

主『有所思』の詩にある「紅臉桃花色」はピンク色を指すものである。唐代以後は「紅」が「赤」のかわりとなりはじめ、赤紅色、鮮やかな赤を表示するようになった。王維の『相思』の詩に、「红豆生南国、春来发几枝。愿君多采撷，此物最相思。（红豆は南方の暖かい地方に生え、春になると多くの枝を芽吹かせる。どうこの実を多く摘み取って下さい。この红豆は物思う花だから）」と詠んでいる。红豆の色は赤紅色である。白居易は『憶江南』の詩の「日出江花紅勝火，春来江水绿如藍。（日出づれば江花紅きこと日に勝り、春来たれば江水緑なること藍の如し）」の「紅」は濃いくれない色で真っ赤であり、ピンク色ではない。現代中国語では「紅」を最も多く使用し、「赤」や「朱」は次第にあまり使われなくなった。

「粉紅色」は「桃色」とも称した。女性の顔色を形容するのに常用された。唐詩には「人面桃花相映紅」という句がある。また桃花色は艶やかで落ちやすかったので、「粉紅色」或いは「桃色」は「輕薄色情」のような意味をも象徴した。「桃色新聞」（艶聞）、「桃花眼」（色っぽい目つき）、「桃花運」（女色の運）などのようなことばがある。

「紅」は祝い事、喜びの象徴である。春節には赤い紙に對聯と福の字を書いて貼り、窓に赤い切り紙細工の花を貼り、門には赤い提燈をつる。結婚は「紅喜事」といい、花嫁は赤い衣裳を着て、門前には祝いの双喜字を貼り、夫婦の部屋には紅い蠟燭を点す。

「紅」は隆盛繁盛を象徴し、賑やかな日々を「紅火」といい、幸運を「紅運」といい、仕事が始めから成績をあげることを「滿堂紅」という。

近現代になってから、「紅色」は革命、進歩的、先進的な意味合いを持ち、「紅衛兵」、「紅領巾」、「紅旗単位」（先進的な職場）、「紅色政權」（革命政權）、「紅五類」（労働者、貧農、下層中農、革命の軍人、革命の幹部）などのようなことばが生まれた。

「紅眼病」はもともと目の病気、急性結膜炎のことであったが、他人が成功したり金持ちになったりするのをみて、或いは相手の能力などを嫉妬することを「紅眼病」といつている。

中国語で「赤縄」とは夫婦の縁を意味し、「赤状符」は未来のことが書いてある文の意、「赤子之心」とは自然で、偽りかざらぬ心の意味である。また中国では一般的赤は幸福や幸運のシンボルとされるが、沖縄では「死」を、マヤ族は「血」を、インドでは生命力の表象とされている。赤は中国や日本においては一般的におめでたい色とされるが、アフリカのンデンプ族は赤を善悪両方の意味に使用しており、アフリカのテソ族は病気、死、危険の意味としている反面、南太平洋のトロブリアード島民は赤を光、生气、魅力、性愛の象徴としているという。ここでは赤が生死両面を表し、決して赤が普遍的にめでたい色であるとは言えないわけである。

西洋では十五世紀頃、赤を式服の色として用い、古代ローマ時代の花嫁のヴェールは炎の色であった。英米では赤、特に濃赤は悪魔を表すと古くから言われている。

3.3 黄の象徴

甲骨文や金文では「黄」という字は黄色の玉石の意味であり、後に黄色の玉石の語義が拡大されて広く黄色を指すようになった。『説文解字』は字形を分析して、中間に田の字があり、「黄」は土地の色であり「田」の部に属すると解釈している。

黄色は土に属し、色が土と同じである。中国の大地は黄色の土壌が多く、人々はよく黄色の土地を中国の象徴として用いる。「黄河」は古代には「河」と呼ばれたが、黄土地帯を流れ、大量の土砂を含み、水の色が黄色に変わったので「黄河」と呼ばれるようになった。黄河は広大な

中央地域を流れるので、中国を象徴するようになった。

黄色は五方の中の「中」に属するので、古代の人は黄色を皇帝の好む「中央正色」とした。唐朝の高祖李淵は皇帝は「黄袍」を着用し、人民が使用することを禁止するという規定をつくった。中国では黄色を天子の色とみなしている例として「黄門」が「宮城の門」や「禁門」をいみする。黄色い上衣で天子の衣服に用いたものを「黄袍」と言う。皇帝は清朝にいたるまで黄色を独占し続けた。このように黄色に関連のある言語現象には悪い意味はなかった。

隋、唐以前の皇帝は黄色を愛好し、周の天子の衣類や帽子も「玄衣黄裳」であった。漢朝の皇帝も黄色を尊んだ。しかし皇帝が黄色の衣服を着るということはまだ制度化されていなかった。隋朝の皇帝は黄色の服を平常でも着るようになった。『野客丛书 禁用黄』に「唐高祖武德初，用随制，天子帝服黄袍，逐禁士庶不得服，而服黄有禁自此者。」とある。唐朝の高祖李淵は皇帝は「黄袍」を着用し、人民が使用すること禁止するという規定をつくった。「黄袍」は皇帝の身分の象徴になったのであった。このような文化背景の上で、人々は自然に「黄色」を「高貴、尊厳」と連想する。

後周時代に趙匡胤が太尉となり、将兵が陳橋駅で反乱を起こした時に将軍たちは彼に黄袍を着せて、皇帝として立てたので、「黄袍加身」という成語がうまれた。皇帝は清朝にいたるまで黄色をひとり占めにしてきた。

皇帝の住む宮廷には黄色の瑠璃瓦を用い、皇帝の車の幌を「黄屋」と呼び、皇帝の詔書を「黄敕」と呼び、科挙試験の殿試の後で公布する成績発表の掲示を「黄榜」と呼んだ。清朝の皇帝は皇室の子弟が黄色の帯を用いることを許し、それで清朝では皇帝の護衛武官に賞として黄色の馬褂を着用させた。これは皇帝が遠出をする時に威厳を示すためのもの

であった。そのほかに皇帝は「黄布」、「黄紙」を仏教徒、道教徒に下賜して使わせた。仏教や道教で黄色と教義が結びついているのは、黄色には「超世脱俗」の意味があるからであり、黄色を使うことによって濃厚な宗教的雰囲気を出そうとしているのである。だから、道士の着る服、香り袋、仏教建築、装飾に黄色が使われている。「黄卷」は仏教、道教の経典のことである。

しかしながら、「黄毛小」とは幼年者のこと、「黄口小兒」はくちばしの黄色い人を指す。「黄发」は長寿の象徴である。『詩・魯頌・閟宮』に「黄发台背，寿胥与试」とある。ここでの「黄发」は人が年をとり、髪の毛が白から黄色に変わり、長寿の意味である。成熟した穀物は黄色を呈するので、収穫をも象徴している。「青黄不接」は前年の穀物がなくなり、新しい穀物がまだ出ないことを指す。

近年、「黄」というと人々はすぐ「黄色小説」、「黄色電影」、「黄色録像」などを連想し、こうした「黄色の文化」は一掃しなければならないものであり、それゆえに「掃黄」といわれる。黄色で代表されるものは色情または低俗の意味しかもっていないのである。

黄色が色情や低俗な意味を持つようになったのは、西洋文化に由来するものである。中国は西洋の黄色に関連する文化義を受け入れて多くの黄色に関する悪い意味の言葉が生まれた。

黄了という言葉があるが、「他们俩儿黄了。」と言うと「あの二人別れました。」という意味である。「黄毛丫头」とは小娘、くちばしの黄色い娘を意味する。「黄花女」は処女のことを意味する。金の俗称は「黄金」である。

『色の文化誌』（風見明 1997）によれば、日本では一般的に黄色は、黄金、愉快、快活、希望、お喋り、陽気さ、明るさなどを表す。中国では「黄髮」は老人、「黄雀雨」は時雨や秋雨、「黄了」はだめになった、「黄

毛小」とは幼年者のこと、「黄瓜」はキュウリのこと、「黄虫」はバッタ、「黄花女」は生娘のこと、「黄泉」は地下の泉、未来、来世など、「黄泉客」はあの世へ行く旅人、「黄梅雨」は梅雨を指している。

昔から中国では赤、青、白、黒とともに黄色は正色として尊ばれてきたが、黄色も東西の青、西洋の紫、スカーレットなどのように善悪両面を象徴する、両面性のある色である。ドイツ語の黄色は妬嫉を表し、フランス語では「黄色く笑う」は「苦笑い」の意味であり、アメリカ西部では黄色いリボンが未婚女性のシンボルとして用いられる。(福田邦夫 1999『色の名前はどこからきたか』を参照)

黄色は古代ローマでは帝国の色として使われたが、その反面、黄色い髪の毛は売春婦のシンボルにもなっていた。西洋では高貴な色として多くの国でパープルを使うが、中国では黄色は高貴な色で、偉大さや神聖さを表し、赤に次いで好まれる傾向が見られる。その他の国でも黄色は王室色として用いられているところがある。インドでは黄色が光輝のシンボルともなっている。

3.4 白の象徴

『説文解字』によると、白の字形は「日」に由来する。日光は白色だからということである。『説文解字』には白色の具体的な事象が多く収められている。例えば、月光の白は「皎」、人の皮膚の白は「皙」、老人のひげと髪の毛の白は「皤」、雪の白は「皚」などである。

白は「四季」の「秋」に属する。秋は万物がしばみ枯れる侘しい季節である。それで、白色は不吉の象徴であり、喪服の色である。民間では葬式のことを「白事」といった。『史記・荊軻伝』に荊軻が秦王暗殺の使命を帯びて秦国へ赴く時、「太子及賓客知其事者皆白衣冠送之。(太子も客も事情を知るものは皆白装束で見送った)」と記されている。中国

が喪の色をこれほどまでに白に徹してきた根拠、理屈に白という字の語源がある。白は「入」と「二」を合わせた会意文字であり、陰陽道によれば入は入り日に通じるから陰であり（日の出は陽）、二という数字も陰である。つまり、白は陰が二つ重なったまさに陰気の極であり、弔事の象徴色としてぴったりというものである。奇数は陽、偶数は陰の構図は身近に見受けられる。中国生まれの五節句がそうで、奇数月と奇数日の組み合わせであり、七草は一月七日、桃の節句は三月三日、端午の節句は五月五日、七夕は七月七日、重陽は九月九日となっている。日本ではさかんになった七五三の祝いもお同じ思想によるものである。『礼記』に「披麻戴孝」ということばがあるが、いわゆる「孝」は「白」である。民間では葬式のときには、白衣を着、白い帽子をかぶり、白い靴をはく。今では人々は白い花をつけ、白い花輪を送り、死者のはの尊敬、哀悼を示す。

なお、中国の都市部では最近、西洋式の黒い腕章をつけるだけの喪服が浸透してきている。同じ中国でも台湾は白喪服の伝統を守っており、西洋化は見られない。

しかし、白色は明るい色であり、古代人は政治がよく行なわれている太平の世には瑞兆して白色の動物が現れるので、国家にとってもめでたいことだと考えたようである。

古代では庶民のことを「白衣」といい、のちに「布衣」というようになった。科挙に合格していない人を「白身」、「白丁」と呼ばれていたので、白い衣服を着ていたが、これは喪服のような白い麻の衣裳ではなくて、白い木綿または絹織物の衣裳であった。『水浒传』に「白衣秀士王伦」という、科挙に不合格となり、腹を立てて山賊になった男が出てくる。科挙に合格したが、退職した官僚は功名はなくなったがまだ権勢があったので、昔は「白衣某某」、「白衣尚書」、「白衣宰相」などと呼んだ。「白衣」はまた仏門に入っていない俗人をもいうが、これは仏教の僧や

尼が「黒衣」を身につけるのに対して「白衣」といったものである。「白巻」は白紙答案を意味する。

白色は純潔の象徴義があった。白色は穢れがなく、人々の好むところであった。昔の人が白玉を大事にしたのも、その品質が高潔であることによるものである。「白璧微瑕」（完全無欠）という言葉がそうである。「真相大白」（真相がすっかり明らかになる）、「一清二白」（きわめてはっきりしている）、「一穷二白」（一に貧困、二に文化的空白）など。

五四運動以後、白色は新しい意味を持つようになった。ロシアのプロレタリア革命では、白色は反動の象徴となり、反動軍は「白軍」、「白匪」と呼ばれ、国外に逃げた反動分子は「白俄」と呼ばれた。マルクス・レーニン主義が中国に伝わり、中国革命では国民党の反動派の軍隊は「白軍」、反動政権の支配地区は「白区」と呼ばれた。新中国の成立後はブルジョア思想は「白」とみられ、政治的な進歩を求めない専門知識だけの持ち主を「白専分子」と呼んだ。このような政治文化義は外国から来たものであるとも言えるが、古代の五行説では、西方は「白虎」で、「刑天、神を殺し」、肅殺の秋をつかさどった。古代では秋に戦うのは不義とされたし、犯罪者を秋に処刑した。従って、白は死、恐怖、不吉な兆し、反動、悲哀等の意を象徴している。むしろ、「白」には「反動」の意を持つのは古代からであるとも言える。

「白費」は無駄づかい、「白吃」はただで食べる。「白描」は彩色をほどこさずに、墨だけで描かれた絵、ありのままに写し出すことを意味し、「白話」は口語、「説白」は口語のせりふを意味する。

3.5 黒の象徴

黒は「五行」と関連して「水」と対応し、「五方」と関連して「北」と対応し、四季と関連して「冬」と対応するのである。金文の中には

「黒」は使用されなかった。代わりに「玄」が使われている。『詩経・邶風・北風』に「莫黒匪鳥」（黒きとして鳥に匪ざるは莫し）とある。この「黒」は不吉の意味である。

秦の始皇帝は自ら秦王朝が「水徳」に属しているとして黒色を崇拝していた。秦代には普通の人はいく布で頭をおおっていたので、人民のことを「黔首」と称したが「黔」も黒の意味である。仏教徒は黒僧衣を着たが、当時の人々は黒色が一種の厳粛で荘厳な色だと考えていたことが分かる。

京劇の臉譜では「黒」は「力が強く実直」な人をしめしており、張飛や水滸劇の李逵はすべて黒いくまどりで登場する。一方、白いくまどりの曹操は奸臣である。現代になると「黒」と「紅」が常に対になって登場する。「紅」は革命、進歩を象徴している。一方「黒」の象徴は反革命、後退、頑迷である。この点は、「黒」と「白」は同じで、「白」は政治的に例えば「白軍」で、「紅軍」と対立し、反革命側を表わしている。

1966～1976の文化大革命の期間に、「黒」は反動の意味の象徴であったが、これはおそらく外国文化の影響を受けたものである。ロシアの民主革命の時期、すなわち1905年以後は、警察、憲兵や保皇党が労働運動を鎮圧するために武装集団を結成したが、当時は「黒幫（反革命集団）」と呼ばれたということである。中国の革命運動にその文化義を取り入れて、反動集団のことを「黒幫」と呼び、「文革」中にさらに拡大されて、一連の黒色の語彙が生まれたのである。

黒と言うと、人々はすぐ黒いと言う色に関連する悪い意味の語彙を思い浮かべるに違いない。例えば、「黒幫（反革命集団）」、「黒手（影の人）」、「黒秀才（反革命の知識人）」、「黒後台（黒幕）」、「黒五類（黒い五種類の人、文革中階級の敵とされた地主、富農、反革命分子、悪人、右派分子）」などである。「無産階級文化大革命（プロレタリア文化大革

命)」の中では黒色は反動の象徴であり、人々はいつも黒色のことに触れると顔色を変えた。

文革中にできた新語は、社会の変化とともに、死語と化していったが、黒そのものが暗黒を意味しているので、「死、恐怖、陰険」などのマイナス義を象徴していることばに使われている。それに黒色は暗い色であり、転じて暗黒で、明るさのないことの意味となった。それで人目につかない所でこっそりを行なう、公明正大でない事は、黒で形容されるようになった。例えば、「黒市交易（やみ取引）」、「賣黒貨（盗品、闇商品などを売る）」、「賺黒钱（不正な金儲け）」、「開黒店（旧時、人を殺し、ものを奪う宿屋を開く。「文革」中よく使われた言葉で、反革命組織を作るの意）」、「結黒帮（黒い一味の組織をつくる）」、「説黒話（隠語をつかう）」等いずれも公然とした活動ではないので、「黒」とよばれるのである。

黒色は暗い色、白色は明るい色であり、黒白は相対応しているので、人々は常に「黒」を誤りや邪悪、「白」を正確や純粹に喩えた。「黒」は悪、「白」は善と言うことになった。それで「颠倒黒白，混淆是非（是非善惡を逆さまにする）」という成語が生まれた。「心黒」は腹黒いことを言い、「手黒」はやり方が悪辣なことを言う。

「白臉」や「紅臉」は、京劇のくまどりのほかにも、日常生活の中で「在家里，爸爸唱白臉，妈妈唱紅臉。」（お父さんは厳しく、お母さんは優しい。）のように使われている。「紅臉」はほめ役、「白臉」は憎まれ役である。

「黒」はさらに一步進んで一切の非合法なことの喩えに用いられる。例えば「黒戸口」、「黒孩子」は戸籍のない人のことである。「黒戸」は住民登録をしていない所帯のことである。「黒車」はナンバープレートか営業許可証のない車のことである。

現代中国語の中では古代漢語の影響で「青」や「緑」で黒を現していることがまだ幾つかが残っている。例えば「青衣」は黒い服、「青布鞋」は黒い布製の靴、「緑雲」は美しい黒髪を意味する。

4. 色彩認識の象徴化—京劇の臉譜の表すもの

臉譜は歌舞伎の隈取りに似ているが、それは役者が色と形で自分の顔をキャンバスにして描きだすものである。そこには、中国人の持つ色に対するイメージ、形に対する感覚が表現されているのである。

臉譜の起源は南北朝と隋唐時代（三八六～九〇七年）に行われた「仮面歌舞」であった。現在、臉譜に使われている主な色は、紅、紫、黒、白、藍、緑、黄などや暗紅色、銀鼠色、金、銀などである。そしてそれぞれの色はそれぞれの性格を象徴、表現している。至誠、赤誠である関羽は紅、廉直、正義の裁判官である包公は黒、そして奸計と知謀の曹操は薄白で表している。以下にそれぞれの色が象徴するものを記してみよう。（赵梦林 1992『京剧脸谱』p.25「脸谱的象征性表现手法」よりまとめたもの）

- ①紅色 紅は最も尊ばれる色で、至誠、忠義を象徴している。代表は関羽である。
- ②紫 紅の次に尊い色で、血氣盛んだが肅然とした性格を現す。紅や黒と併用し、若き日の直情・血氣が年齢を重ねることで重厚さを増したことを示す。
- ③黒 三国志の英雄・張飛や水滸劇の李逵など、沸き上がる激情をどうにも押さえられず、ついつい粗暴、過激な振る舞いをしてしまうものの、実際は無私で真心の固まりのような

性格を表現する。また、包公に代表されるように、顔形が醜いものの廉直である性格をも示す。

- ④白 白には猜疑、陰謀の気象が宿る。奸智に長けた武将は白。曹操など典型。薄い白は必ずしも大悪という訳ではない。眉や目が細く描かれていればいるほど、奸計に長けた大悪人だ。
- ⑤藍 黒に近いが、より粗暴な一面を持つ。黒の上に藍を重ねた場合、単に粗暴、剛毅だけではなく知謀にも優れている。
- ⑥青 緑に近い性格。邪神、妖怪、物の怪、妖気、化け物などの色。
- ⑦緑 藍色と似通った性格。同じく凶暴でも緑は爆発気味、常に平静ではいられない性格。
- ⑧黄 粗暴で陰謀をめぐらすが、それを表面に出さない人物。勇戦する武将を示す。
- ⑨灰 壮年の血気も薄れた様子を表すため光に反射しないように顔料の油分を抜く。若い時に黒色だった者が老境にある状態を示す。
- ⑩金 仏教の教典にある「身に金光を現す」にちなみ莊嚴、嚴肅を表わす。神、仏に使われる色。
- ⑪銀 金に次ぐ高貴な色。比較的に地位の低い神や仏に使われる。

中国劇は人物の性格を表すため、人物本来の面目を乗り越えるために臉譜を描くには美学の観点から最も代表的な特徴を誇張し、適当に顔に集中した。遠くから見ると性格が一目瞭然で、色彩ははっきりしていて、近くで見ると図案が精細である。「远看颜色近看花」の技術効果がある。これは大胆なしかも巧妙な表現手法である。人物の容貌（年齢、美醜）だけではなく、社会的地位、普段使っている武器まで図案で反映するこ

とができる。

紅が最上の色と言われる理由はおそらく紅を人間の生命力の象徴としようとする中国人の古くからの呪術宗教的な一面に起因しているのだろう。いずれにせよ、京劇の重要な要素である臉譜とは、中国人が色に託したイメージで性格を表象させようという試みなのである。

5. むすび

色は遠い時代から具体的事物の連想（例えば赤から太陽や炎を連想する）または抽象的観念の連想（例えば赤から情熱や革命を連想する）に用いられてきて、ある時にはそれがシンボル化されて、職業、地位、身分、四季なども表し、我々の民族文化のあるイメージを表す。

中国人は古来より、色彩語で自らの思いを表し、感情を述べるのを好む傾向がある。これは中国の伝統的な文化と密接に結びついている。人々の色彩に対する感覚は、その人の生活環境と大きな関連があり、文化や生活環境の影響を受けやすい。従って、同じ民族の色彩に対する感覚やイメージ及びこれによって生まれる象徴な意味合いには共通性がある。中国では伝統的に五行と色が対応しているから、人々の色彩に対する感覚、感情はこの五行説からなかなか抜け出すことが難しい。封建社会で色を尊ぶ考え方が確立し、地位、階級を区別してきた。この五色は伝統観念によって、人々の間で習慣化され、語彙のなかに定着していくのである。従って、中国人の深層意識の中に色彩語の持つ象徴性が深く根づいている。中国語の色彩語彙も古くから伝わってきた伝統性を守りながら、新しい文化を取り入れようとしている。最近では、西洋文化の影響で色彩語には新たな象徴義が生まれた。

参考文献

- 叶军 2001『現在漢語色彩詞研究』 内蒙古人民出版社
- 赤池鉄士 1981『英語色彩の文化誌』 研究者出版
- 刘鈞杰 1985「颜色词的构成」『语言教学与研究』
- 伍铁平 1986「论颜色词及其模糊性质」『语言教学与研究』
- 张旺熹 1988「色彩词联想意义初论」『语言教学与研究』
- 张清常 1991「汉语颜色词」『语言教学与研究』
- 刘云泉 1991「色彩色彩词与社会文化心理」『语言·社会·文化』
- Kay, Paul 1975 Synchronic variability and diachronic change in basic color terms. *Language and Society* 4 (3): 257-270
- Kay, Paul. and Chad K. McDaniel 1978 The linguistic significance of the meanings of basic color terms. *Language* 54 (3): 610-646
- 赵梦林 1992『京剧脸谱』 昭华出版社
- 福田邦夫 1999『色の名前はどこからきたか』 青娥書房
- 風見明 1997『色の文化誌』 工業調査会
- ゾラー著 小和田節子訳 1997『色彩の魔術』 株式会社 DHC
- 姚小平 1998 年第 1 期「基本颜色词理论述评」『外国語教学与研究』
- 吴平 「汉语颜色词语义分析」『中国对外汉语教学学会, 北京分会第二届学术年会论文集 2001, 6』
北京语言文化大学, 古田朱美、立松昇一「中国語の色彩語彙と象徴」 流通経済大学
論集 30 (3) 1996
- 郑高咏「中, 英, 日颜色词信息传递对比」奥羽大学文学部纪要 8 (11) 1999, 12
- 矢野光治「現代漢語における色彩語彙の表象」 立正大学文学部研究紀要 (18) 2002
- 『汉语大词典』 四川辞书出版社 1990
- 徐朝华 2003『上古汉语词汇史』 商务印书馆
- 高亨注 1980『诗经今注』 上海古籍出版社
- 目加田誠訳 1969「詩經・楚辞」『中国古典文学大系 (15)』 平凡社
- 野口定男訳 1969「史記」『中国古典文学大系 (10 11 12)』 平凡社
- 竹内照夫訳 1969「礼記」『中国古典文学大系 (3)』 平凡社
- 許慎 1979『説文解字』 中華書局影印
- 宇野精一 1996『孔子家語』 明治書院
- 安井稔 1978『言外の意味』 研究社出版